

胆沢川は境界にあらず

□対立の構図は…
鳥海柵があった11世紀はどんな時代だったか。北上川に注ぐ胆沢川が、一つの境界線になるのではないかと、昔から漠然と考えていた。北上

川に注ぐ支流の北側に安倍氏の柵が営まれていた。多くの研究者が、ゆくゆく安倍氏が陸奥の国司と戦うことから、安倍氏が北上川に注ぐ支流を境界にその北側に拠点を構え、南側の中央政府と対立するという印象を与えてきた。

しかし、そうではない。初めから安倍氏は中央政府と戦争するつもりではなかった。むしろ、中央政府の一員として、陸奥の奥六郡の地域支配

鳥海柵伝本丸区域から出土した墨書土器。「五保」の文字が見て取れる

に当たった人物。だから、胆沢城から胆沢川を飛び越えて、むしろ胆沢川の北側も中央政府の支配下にあることを示す必要があった。だから、四面相付の建物などもあるわけである。

□「五保」の墨書土器
指定範囲西部のSB 01・02は、胆沢城時代の遺構だと考えられている。出土した遺物の中に、「五保」と書いた墨書土器があり、この墨書

という装飾用の壺のかげらが出た(その存在から)胆沢川を、逆に境界にしてはいけないのだという意識を読み取るべきであろう。

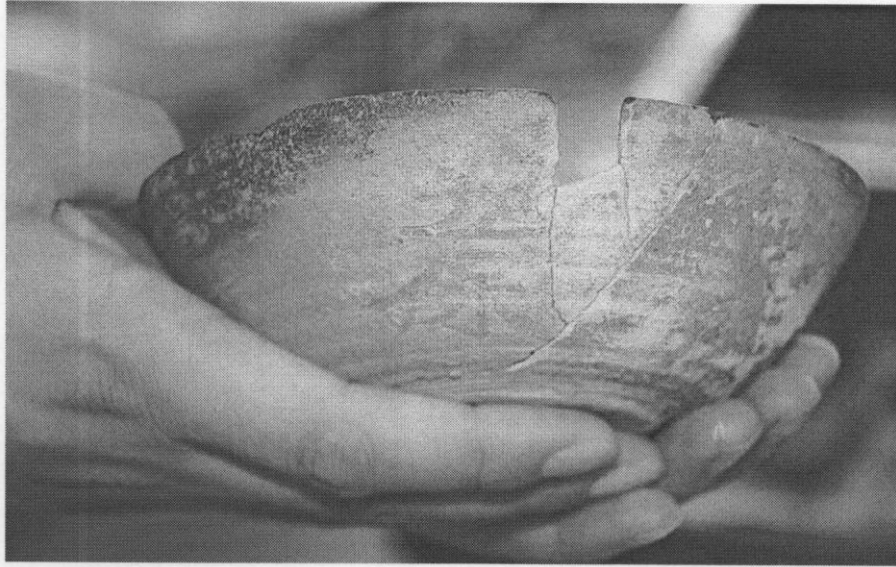
胆沢川の南側が鎮守府の支配地域、その北側が蝦夷の地域というような境界にはいけない。胆沢川を越えた地域にお

そらく胆沢城の官人が住んでいた。ただし、いざ北の方から蝦夷に攻め込まれた時には胆沢城に逃げ込めるよう、胆沢川の北辺部に四面庇の建物を営んでいた。そういう状況が分かるのではないかと考える。

□柵営むストーリー
今回の国史跡の指定範囲に、これらの遺構が含まれたことに重要な意味があると思う。

鳥海柵遺跡は、安倍氏の宗任が鳥海柵を築く前から、既に胆沢城時代から重要な政治拠点として目されていた。だからこそ、宗任がその地を継承して、鳥海柵を営んだということが分かった。

鳥海柵が確認され、それに先行する胆沢城期の遺構が見つかったということは、9世紀から11世紀という前九年合戦に象徴される安倍氏の時代の前提(重要な政治拠点としての位置づけ)が見つかったと言える。そして、そこに安倍氏が入ってきた。鳥海柵を営んだというストーリーが分かる重要な成果と考えている。



金ケ崎の国指定史跡

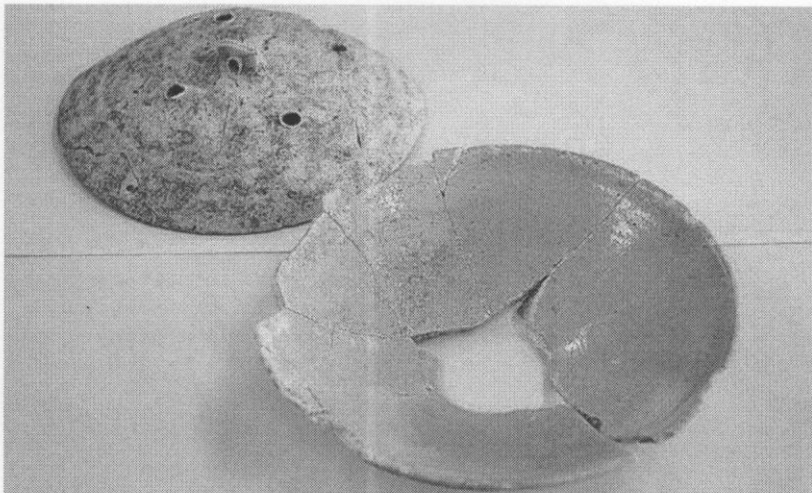
鳥海柵を知る

— 町民大学 2013 シンポジウムより —

3

大平 聡氏 (宮城学院女子大教授)

鳥海柵の時代 ①



胆沢城跡から見つかったものと同じ緑釉の唾壺口縁部(右)と香炉のふた